発行／中島なおきを応援する会　羽生市南羽生 4-17-2　☎070(6488)4588【討議資料】NO,49

無所属

中島なおき

【42歳】

このままじゃダメだ。

子供にツケをまわさない！

3つの政策理念

持続可能な世の中の構築

話題作りを最優先にするのではなく、市が抱えた諸問題を解決すべく政策を提案、推進する。決して子供たちにツケをまわさない。

共生社会の実現

少子化、高齢化に対応すべく、人と人の「絆」を重視。地域や組織の力を最大限活用する仕組みを探究する。

予算の有効化を追求

「予算を使い切る」という発想から、成果、目的重視への発想転換を促進。行政の生産性を高め、少ない予算で最大の成果をあげることをめざす。

～5つの約束～

①議会レポートを作成、配布します。
②議会活動、政治活動を公開します。
③毎年、政治活動費の使途を公開します。
④議会報告会を行います。
⑤これまでどおり正々堂々発言を続けます。

過去の清算は未来への責任
市政改革　再始動！

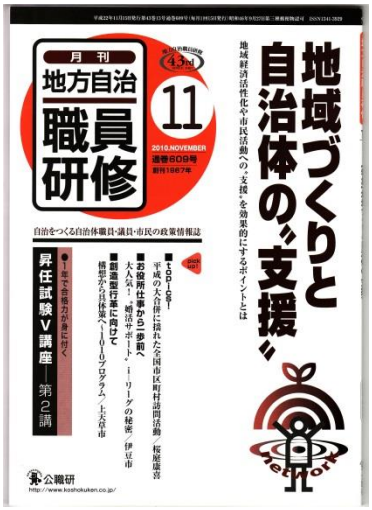
「ゼロからの挑戦日記。」～第２章～　中島なおき　検索

～ 公職研「自治体職員研修」に寄稿～

平成22年夏に地方自治専門誌を手掛ける出版社「公職研」から執筆依頼を受け、不肖中島の～議会を変える議員をつくる～という表題で寄稿した約5,000字が「自治体職員研修」に掲載されました。

昨年は地方議会、地方議員の数々の不祥事がメディアを賑わせました。現在議会、議員は大きく信頼を失っています。そんな時だからこそ「地方議会」と「地方議員」の仕事と役割について見直すきっかけになってくれることを切望し、その全文を掲載いたします。

長文ですがご一読ください。ちなみに原稿料は13000円でした。（笑）



議会は変わる　～議会を変える議員をつくる～

●一人の若者の話

ごく普通の若者がわが子の生誕をきっかけに、自らが住むまちに目を向けるようになる。しかし、日々の生活に精いっぱいで自分の住むまちに関心がなかった若者である。議会について詳しく知るはずもなかった。

市政、市議会について調べてみると、議員の数は20余名、平均年齢は60歳を超えており、同世代の代弁者が1人もいないことがわかった。この時、自分のまちについて調査を通して詳しくなっていた若者は、市の平均年齢が44歳であることを知っていた。市民と議会にここまでの世代差があるとは…。そんな状況を傍観するわけにはいかなかった。

資金も組織も持たず選挙に挑み、当選したという候補者を数知れず見聞きするが、果たして都市部とは決して言えないこのまちで本当にそんなことが通用するのだろうか。そんなときに新聞で「若手政治家養成塾・塾生募集」の記事を目にする。

●第1期　若手政治家養成塾（平成18年9月～）

塾役員構成

代表幹事 兼 塾長　白土幸仁（春日部市議　現在埼玉県議）　事務局長（会計）　菅原文仁（戸田市議　現在埼玉県議）　副代表幹事 兼 神奈川塾長　大桑正貴（横浜市議現在同）　監査　平松大佑（新座市議　現在会社員）　広報担当幹事　永沼宏之（行田市議　現在会社役員）・松本武洋（和光市議　現在和光市長）

塾の設立趣旨は「2006年夏、関東の若手地方議員有志は『地盤・カバン・カンバンは無くとも高い志で政治家を目指す若者を支援し、地方から日本を変える』ことを目的とし、党派に属さない若者の議会進出を支援します。若手政治家養成塾は、単なる当選だけを目的とせず、次世代の責任あるリーダーを養成します。特に、下記の3つの力を鍛錬していきます。

①政治哲学を持ち、これを背景に自ら政策を探求する力
②政策実現のため自ら行動する力
③リーダーとして人を惹きつける力

というものであった。

平成18年9月に埼玉県内の20代から30代の若手議員が中心となり開講した。翌年の平成19年4月の統一地方選挙に向け、地方自治の基礎から街頭演説のノウハウを伝授し、一人でも多くの若手議員を増やすのが目標であった。

塾生として応募してきたのは約40人。小論文（テーマは「私が政治家になったら」）と面接で選考し、半分に絞った。政党や特定の支持団体がない人を対象としているため、親の地盤を引き継ぐような人の入塾は認めなかった。

そして、9月中旬に「若手政治家養成塾」は開講された。塾生は20名でスタート。塾生の中には会社員、主婦、自治体職員、教員、フリーターなど多種多彩の人々が集まった。

平成19年1月までの6回の講義で、1期目、2期目の現職若手議員らが徹底的に選挙ノウハウを伝授。政策、ポスター、チラシの作り方、配り方、マイクの持ち方に目線の置き方まで細部に

至る指導、街頭演説やチラシ配りなどの実習も行われた。

選挙ノウハウだけではない。現職若手議員が講師役を務め、「地方議会の現状」や「マーケティング」の講演を行い、教育施策の先進自治体への視察も実施した。財政指標の読み取り方、自分の住む自治体の課題や特徴を見つけ方など、講義内容は多岐に亘るものであった。

また、年が明けて、人々の興味が統一地方選挙に向いてくると、テレビ、新聞、雑誌等、複数のマスメディアからの問い合わせもあり、若手政治家養成塾の活動がゴールデンタイムにテレビの全国ネットでお茶の間に届けられるということもあった。

塾生20名のうち、正真正銘「地盤、看板、カバン」なしで6名が統一地方選挙で市区議会議員選挙、首長選挙に立候補。統一地方選挙から時期をずらして3名が立候補するも、結果は厳しく、2勝7敗で第1期の「若手政治家養成塾」としての活動を終えた。

●第2期若手政治家養成塾(平成22年4月～現在)

塾役員構成

代表:井上 航(和光市議 現在埼玉県議) 副代表:中島直樹 上田由紀子(文京区議)、神谷大輔(朝霞市議)、河野芳徳(志木市議)、島田久仁代(新座市議)

平成22年、年が明けてまもなく、平成23年の統一地方選挙に向け、塾の再始動について打ち合わせが始まる。第1期の若手政治家養成塾は成功だったのか、失敗だったのか。当落結果だけでみれば、塾生個々の事情があったにせよ、9名の立候補者のうち、2名しか当選者を出せなかったことを考えると、塾のあり方に課題を残したことは否めない。激論の末、第2期の若手政治家養成塾は塾出身の、現在1期の若手議員が中心となり、第1期の反省点を活かした塾の運営を行っていくことになる。

第2期 若手政治家養成塾設立趣旨

我々、無所属若手地方議員有志は、国政・政党政治への不信感の中、「無所属」で「地方」から日本を変え、未来に誇れる国にするために「地盤・看板・カバン」は無くとも、高い志をもって政治家を目指す若手の人材を募集します。

若手政治家養成塾では、単に当選だけを目的とせずに、政策立案・政策実現能力など、議員に必要とされる様々な「議員力」を養成します。その上で、若いだけでは当選できないという厳しい地方議員選挙を戦い抜く力を、実践と講義を通して養成します。

この言葉もまた、事務局全員で練りに練った世間へのメッセージだ。

第1期が9月開講であったのに対し、第2期は5月開講とした。その理由は、第1期の若手政治家養成塾は、結果として選挙を勝ち抜くノウハウを身につけるための講義が中心になったこと、また、自分やまちを見つめる時間の少ないまま慌しい日程で、塾生が選挙に突入しなければならなかった、という反省からである。

第2期若手政治家養成塾は、被選挙権を持たない学生から、経営者、建築士、ゴルフインストラクター、フリーターといった、塾生10名で、5月中旬に開講した。日程は8月上旬までの全7回のスケジュールとした。

政治家と選挙は切っても切り離すことは出来ない。しかし、選挙一辺倒では政治家養成の本質を見落としてしまう。そこで交流のある大学教授から、現在の地方議会の課題点、今後の地方自治、地方議会の展望などのより専門的な講義や、地方財政の本を執筆している現職市長の講義も行った。

また、議員として、最低限の知識を身に付けるために「議員力検定」の受検にも挑んだ。

講義前半では選挙はなるべく意識をしないようにして、役員を務める現職議員や協力議員らから各自治体の議会の現状にまつわる講演や塾生自身が自己分析を行うという講義も行った。

とは言っても、前出のように、政治家と選挙は切っても切り離すことは出来ない。選挙で勝たなければ、議員として、自治体の行財政運営には係われない。後半からは、それまで抑えていたものを吐き出すかのように選挙を意識した講義にシフトさせた。

公職選挙法を学びながら、有権者の目を引くチラシの作り方、選挙ポスターの重要性、演説(言葉)の重要性を伝えた。口先だけではない、自らが選挙や後の議員活動、政治活動で実践している塾役員による講義だ。説得力はある。また、駅頭に立ち、実際にチラシ配りを体験する機会も作った。講義毎に塾生から1分間、あるいは3分間スピーチという課題も与えた。

選挙の中でも、特に市区町村議会議員選挙では地区対抗の選挙となることがそのほとんどで

ある。昔からの土地の名士が地区単位で推薦され、その地区の人々を巻き込みながら選挙を戦うのが常道とされる。そこに、「地盤、看板、カバンなし」で誰からも依頼される事なく、自らの意志で立ち上がるのだから、事態は穏やかではない。だからこそ、従来型の選挙に対抗するには、政治に対する「熱意」と「言葉」は最大最強の武器であるということを再三塾生に伝えた。そのことを肌で感じてもらう機会、それこそが最終講義で行った「模擬選挙」である。

●模擬選挙

【模擬選挙】は2部構成で、第1部が「ポスター投票」、第2部が「街頭演説」で獲得票数を競う。

第1部では、浦和駅東口にて、道行く人およそ300名に、どのポスターが印象的か選んでもらった。模擬選挙に際し、広告会社の協力を得て、塾生は本番宛らの選挙ポスターを作成した。大切なのはポスターに書く「キャッチフレーズ」だ。少ない文字に自身の想いを込める。その過程がどれだけ難しいか、塾生全員が経験をした。

第2部で塾生は「街頭演説」にも挑む。演説内容や声の出し方、表情など、塾役員と協力議員が事細かくチェックし採点を行った。

初めての街頭演説に声を震わす塾生、言葉が出ず、原稿を見ながら演説を行う塾生もいた。その様子が多くの人の目にさらされる。塾生にとってはあまりにも非日常的なことであろう。しかし、それが出来なければ、「地盤・看板・カバンなし」で選挙に挑む資格はない。議員になる資格はない。

模擬選挙の結果は非常に面白いものであった。ある塾生が第1部の「ポスター投票」でダントツの票を集めた。しかし、その塾生は第2部の「街頭演説」では最下位だったのだ。その反対にポスター投票で最も苦戦した塾生が、「街頭演説」で最も票を集めるという、塾役員も協力議員もまったく予想しない結果であった。

あくまで模擬だが、本番の厳しい選挙では、この模擬選挙の過程で試された「自分の想いを上手く文字で表現する力」、そして「その文字を自らの声で発信する力」という、2つの言葉を操る力を兼ね備えなければならないことを塾生は身をもって体験をした。そして、塾のカリキュラムは模擬選挙をもって修了した。

●地方議会に目を向けてみる

自分たちの住むまちの議会に再び目を向けてみるとどうだろうか。平均年齢は高く、男性が圧倒的多数。地区や団体に推薦されている議員が100％に近い。名誉職として居座り、議案書に目も通さない。議会での発言はほとんど行わず、地区や団体の利益誘導を優先している議員も少なくない。地方議会の現況はあまりも偏っているのだ。

こういった地方議会は決して珍しくない。都市部から離れれば離れるほど、いわゆる田舎ほど、こういった傾向は強いであろう。

そんな地方議会の現況を憂い、まちの将来の中長期的なビジョンを描き、議会活動に取り組んでいく若年層の議員を増やさなければならない。住民の中には千差万別の行政ニーズがある。議員はそれを的確に把握し、議会の場で行政に届けなければいけないのだ。

地方分権が叫ばれ久しい昨今。国や県から税源、権限が移譲された場合、議員が地区や団体の利益誘導を優先しているようでは、一層複雑・多様化する自治体運営を担う議会を構成することは出来ないであろう。

俗に言う「地盤・看板・カバンなし」で戦えるほど実際に選挙は甘いものではない。

しかし、あきらめてはいけない。いつの時代も世の中に変革が起こるとき、そこには必ず、地方の若者が結集しているのだ。

しっかりとした知識と理念と志をもつ若者をひとりでも多く議会に送り込むこと、それが若手政治家養成塾の使命である。

4月の統一地方選挙。はたして若手政治家養成塾出身の議員が何人誕生するであろうか。次代の若手が誕生した暁には、その新たな若手が必ずや「若手政治家養成塾」を引き継いでくれるはずだ。

私たちが先輩議員から託されたように、私たちが伝えた言葉を・・・。

（おわり）

第2期若手政治家養成塾
副代表　中島直樹

※　寄稿した原文に一部修正を加えております。